

ロシア語母語話者の日本語音声に関する習得研究

－モスクワ調査の概要と日本語能力レベルに関する考察－

小熊利江（東京大学）

rieoguma@hotmail.com

【要約】

本研究の目的は、ロシア語を母語とする日本語学習者の音声習得の実態を明らかにすることである。本稿では、中間報告として研究の概要を紹介し、研究手法やデータ収集の方法、分析方法などについて具体的に示す。その上で、2013年と2015年にモスクワで行った2回の調査によって収集されたデータについて詳しく記し、現在の研究の進捗状況を報告する。さらに、モスクワの学習者による2年間の日本語能力レベルの変化について考察を行う。

1. はじめに

第二言語の学習において、会話などの音声コミュニケーション能力の習得は、学習者からのニーズが非常に高い。しかし、第二言語としての日本語教育における音声コミュニケーションの研究や教材開発は、文字で表すことのできる研究分野に比べると大きく後れている。日本語教育に200年以上の歴史を持つロシアにおいても、ロシア語母語話者（以下、「ロシア人」とする）の日本語音声に関する実証的研究は限定的である。そのため、ロシア人日本語学習者の音声習得の実態については、明らかにされていないことが多い。

本研究では、ロシア人の日本語学習者による発話を対象にして、音声習得研究を行う。これまでほとんど行われてこなかった、ロシア人の実際の日本語発話を収集して分析する実証的研究を行うことにより、日本語音声の習得過程および習得上の困難点について明らかにしたい。その結果を他言語の母語話者と参照し、様々な母語話者による日本語音声の習得過程を解明することによって、音声習得理論の構築とともに日本語音声教育に役立てることが可能になる。また、本研究の結果は、音声指導の方法や教材を考案するための基礎的な資料ともなり得る。

本稿では、筆者の行っているロシア人を対象とした第二言語としての日本語の音声習得研究の全体像を紹介する。さらに、中間報告として、研究の一部である2013年と2015年にモスクワで行われた横断調査と縦断調査の概要を記し、2回の調査によって収集されたデータや分析作業について具体的に示す。最後に、現在の研究の進捗を報告した上で、2013年と2015年のデータを比較し、ロシア人学習者の日本語能力の変化に関する分析を行う。

2. 先行研究とロシアの日本語音声教育の現状

ロシアの日本語学習者の数は、1万1千人余とされる（国際交流基金2013a）。この他にも、ロシア語を母語とする日本語学習者は、日本在住者を含めてロシア国外にも多数いる。しかし、ロシア人の

日本語音声に関する習得研究の数は、まだ非常に少ない。

助川（1993）の研究では、ロシア語研究者の内省によるロシア人の発音の評価が示されている。ロシア人の日本語の発音の特徴がいくつか挙げられているが、それらは1人の研究者の内省による評価であるため、一般化することは難しい。また、戸田（2006）の研究では、ロシア人日本語学習者26人を対象に、自身の日本語の発音の問題点を内省し自由記述させる調査が行われた。その結果、学習者自身が認識している問題点が明らかにされたが、それらの問題点について実際にロシア人の音声を分析して確認する必要がある。渡辺（2011）の研究では、ロシア語圏で日本語教育に携わる日本語母語話者（以下、「日本人」とする）の教師の内省による、ロシア人の発音の評価が行われた。そこでは主に、単音、特殊拍、アクセント・イントネーションなどが、不自然な音声の特徴であると述べられている。現在まで、ロシア人日本語学習者の音声に関する実証的研究が十分に行われておらず、音声習得の実態が明らかにされているとは言えない状況である。

仲矢・稲垣（2005）のロシア・NIS諸国の日本語教師に対する調査によると、ロシア・NIS諸国の日本語教師の不得意分野として「アクセント・イントネーション」の指導が第1位に挙げられている。第2位に「表記（漢字）」、第3位には「音声」が不得意分野として挙げられた。さらに、渡辺（2011）では、ロシア語圏の日本語教師は、学習者からの発音改善の要求に応えられるような体系的な音声指導を行っていないと述べられている。また、筆者自身のモスクワの大学勤務の経験からも、日本語を教える大学教員の多くが日本語音声学の知識の乏しい状態であることが観察された。これは、渡辺の研究で述べられているように、ロシアで日本語を教えるロシア人大学教員自身が、日本語音声に関する教育を受けた経験がないことによると考えられる。

ロシア人日本語学習者に適切な音声教育を行うことを可能にするためには、ロシア人の日本語音声に関する習得研究を推進し、研究成果を広く共有することが重要だと言える。

3. 研究の目的

本研究では、実際にロシア人による日本語発話の音声データを分析し、音声習得の実態を把握することを目的とする。具体的な目的は、以下の4点である。

- (a) ロシア人学習者の日本語の発音には、どのような特徴があるかを明らかにする。
- (b) ロシア人学習者の日本語レベル別の音声習得状況を明らかにする。
- (c) ロシア人学習者による日本語音声の習得過程を明らかにする。
- (d) ロシア人学習者にとって、習得困難な音声的特徴があるかを明らかにする。

4. 研究の方法

第二言語習得の研究においては、主に2つの手法が挙げられる。一方は学習者を能力レベル別にまとめて分析する量的研究としての横断研究、もう一方は学習者1人1人の習得過程について時間を追って観察する質的研究としての縦断研究である。

本研究では、まず横断研究の手法を用いて、日本語能力レベル別に学習者の音声習得状況を明らかにする。さらに、縦断研究の手法を用いて、学習者1人1人の実際の習得過程を詳しく記述し、横断研究から予測された習得過程を検証したい。研究の方法は、以下の通りである。

- (1) ロシア人日本語学習者の発話データを収集し、学習者の音声的な不自然さについて日本語教師に

よる評定を行う¹。

- (2) 発話データを収集した対象者に日本語能力測定テストを実施し、日本語能力レベルごとの音声習得状況と特徴をまとめ、習得過程を予測する。
- (3) 同一の対象者について、一定の期間において同様のデータ収集を行う。学習者1人1人の日本語音声の習得過程を詳細に記述した上で、横断研究から得られた習得過程の予測を検証する。
- (4) 日本語の習得が進んだ、上級レベルの日本語学習者の音声的特徴と縦断的な音声の変化に着目し、ロシア人学習者にとっての日本語音声の習得上の困難点を明らかにする。

5. 分析データ

本研究のデータは、2013年にモスクワで行われた第1調査と、2015年に同じくモスクワで行われた第2調査の2回の調査によって得られた。分析データは、調査対象であるロシア人日本語学習者のフェイスシート、日本語能力を測定するための2種類のテストの結果、ならびに日本語発話の録音音声の3点である。2回の調査におけるデータ収集の概要は、以下のようである。

5-1. 第1調査

日程： 2013年5月²

対象： モスクワで日本語を学習するロシア人大学生52人（1-5年生）。52人のうち51人は大学で日本語学あるいは日本語教育学を専攻している学生、1人はフランス語学を専攻している学生である。

データ収集の方法： 学習者にフェイスシートを記入してもらった上で、2種類の日本語能力測定テスト「(a) SPOT90」³と「(b) J-CAT」⁴を行い、日本人インタビュアーとの「(c) 対面会話」を録音した。データ(a)、(b)、(c)の詳細は、以下の通りである。

- (a) SPOT90： 学習者の日本語能力測定のための聞き取り形式の文法テスト。テストは、コンピュータ上で行われた。（所要時間 10分程度）
- (b) J-CAT： 学習者の日本語能力測定のための聴解、語彙、文法、読解の4分野からなるテスト。テストは、コンピュータ上で行われた。テストの結果により日本語能力が8レベル（初級、中級前半、中級、中級後半、上級前半、上級、上級後半、母語話者相当）に判定される。（所要時間 30-90分程度）
- (c) 対面会話： 現在あるいは過去に OPI⁵のテスト資格を持つインタビュアーと、学習者との対面で行われた会話を録音した音声データ。会話の内容は、以下の3種類である。（所要時間 30-60分程度）
 - (c-1) ストーリーテリング： 4コマ漫画と5コマ漫画の2つが示され、それぞれについてストーリーを考えて話す課題。

1. 一般の日本語母語話者には、学習者の音声的な不自然さについて具体的に指摘することが難しいため、専門的な教育を受けた日本語教師に評定を依頼する。
2. JSPS 科研費 24251010 「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—」（代表者：迫田久美子）の一環として、ロシア人日本語学習者のデータを収集した。
3. 日本語能力測定テスト「SPOT90」は、筑波大学留学生センターにより開発された。
4. 日本語能力測定テスト「J-CAT」は、筑波大学留学生センターにより開発された。
5. ACTFL（全米外国語教育協会）によって開発された、外国語の口頭運用能力を測定するためのインタビューテスト Oral Proficiency Interview の略である。

(c-2) ロールプレイ： 「依頼」と「断り」場面の2種類のロールカードをもとに、インタビュアーとロールプレイをする課題。

(c-3) インタビュー： 約14のトピックについて、インタビュアーからの質問に答える課題。質問のトピックは、主に「過去」「現在」「未来」について話すような内容や、学習者が「意見陳述」するような内容からなる。

5-2. 第2調査

日程： 2015年3月

対象： 第1調査の対象者52人のうち、第2調査に参加可能だったのは、ロシア人大学生22人(3-5年生)と卒業生2人の計24人⁶であった。対象となった24人は、全て日本語学あるいは日本語教育学の専攻である。

データ収集の方法： 学習者に第1調査と同一のフェイスシートを記入してもらった上で、第1調査と同じ日本語能力測定テスト2種類「(a) SPOT90」と「(b) J-CAT」を行った。ただし、第1調査と異なり、第2調査ではテストがオンライン上で行われた。また、第1調査と同様に、日本人インタビュアーとの「(c) 対面会話」を録音した。インタビュアーは、第1調査と異なった。

6. 分析作業の手順

本研究の分析作業の手順は、以下の1~7のようである。

1. 日本語能力測定テスト2種類「(a) SPOT90」と「(b) J-CAT」の結果から、2013年の第1調査の対象者52人、ならびに2015年の第2調査の対象者24人の日本語能力レベルを判定する。
2. 2013年と2015年に収集した「(c) 対面会話」の音声データ(延べ76人分)について、音声のコンピュータ入力と発話の文字化を行う。
3. 延べ76人分の音声データから、各発話につき内容に焦点のあたった部分を3-5分ずつ切り出して編集し、聴覚評価用の音声ファイルを作成する。それとともに、音声評価のための評定用紙を作成する。
4. 聴覚評価用ファイルの音声について、日本語教師による聴覚評価を行う。必要であれば音響分析ソフトを用いて学習者の音声を分析する。
5. 2013年に収集した学習者音声の評価結果から特徴的なものを抽出する。ロシア人日本語学習者の音声的特徴をレベル別にまとめ、音声習得上の難易について予測する。
6. 同一学習者の2013年と2015年の音声の評価結果をもとに、1人1人の学習者の習得過程を詳細に記述する。その実際の習得過程と、手順5の横断研究からの予測を検証する。
7. 日本語習得の進んだ上級レベルの学習者の音声的特徴を分析し、ロシア人日本語学習者にとって共通する発音上の不自然さ、すなわち習得困難な音声的特徴を見つける。それとともに、手順6の縦断研究から明らかになった習得過程において、習得の進みにくい音声的特徴を探る。

⁶ 第1調査の対象者52人のうち、2015年3月の時点で23人が卒業または日本留学のためモスクワの大学に在学していなかった。

7. 現在の進捗状況

現在までに行われた分析作業の進捗について、以下に報告する。分析作業の手順1について、2回の調査におけるテストの結果をまとめて、延べ76人分の対象者の日本語能力レベルの判定を行った。分析作業の手順2については、収集した「(c) 対面会話」の音声データのコンピュータへの入力と文字化作業が、ほぼ終了した。また、2013年に行われた第1調査の音声データの文字化資料は、迫田による研究の成果である日本語学習者コーパスとして、2016年3月以降に順次公開される予定である⁷。分析作業の手順3以降の作業は現在進行中であり、今後、引き続き行っていく。

ロシア人日本語学習者の音声習得状況に関しては、現段階で結果を示すことができないが、これまでにまとめられた日本語能力測定テストの結果について、次の章で分析を行いたい。

8. 学習者の日本語能力に関する考察

2013年に行われた第1調査において、対象者52人の日本語能力は、初級レベル1人、中級レベル46人（中級前半11人、中級17人、中級後半18人）、上級レベル5人（上級前半4人、上級1人）と判定された。52人の中で初級レベルと判定された1人は、大学でフランス語学を専攻している学生であった。

モスクワの大学は9月に始まるため、日本語を専攻する学生は入学時に日本語学習経験のない1年生でも、2013年5月のデータ収集時までには、少なくとも8か月間の学習歴があったことになる。大学の専攻が日本語学や日本語教育学等の51人のうち、日本語学習歴が1年未満の学習者は13人いたが、テストの結果、全員が中級レベル以上の日本語能力だと判定された。モスクワという外国語としての日本語学習環境（Japanese as a Foreign Language）において、非漢字圏で文法体系も異なるロシア語を母語とすることを考慮すると、大学で日本語を専攻するロシア人学習者のゼロ初級レベルから中級レベルへの向上の速度は、かなり速いと言えるのではないだろうか。

約2年後の2015年に行われた第2調査には、2013年に対象となった52人のうち24人が参加した。24人は全て、日本語学あるいは日本語教育学の専攻である。この24人について、2013年と2015年の日本語能力レベルに関する結果を表1に示す。2013年の調査の際には、日本語能力が中級レベル22人（中級前半5人、中級9人、中級後半8人）、上級レベル2人（上級前半1人、上級1人）と判定された。一方、2015年の調査では、中級レベル19人（中級前半1人、中級6人、中級後半12人）、上級レベル5人（上級前半3人、上級2人）と判定された。

つまり約2年の間に、中級レベル全体の学習者が22人から19人に減り、上級レベル全体の学習者が2人から5人に増えたという結果であった。また、2013年に最も低いレベルであった中級前半の学

表1 第1調査と第2調査に参加したロシア人学習者24人の日本語能力レベル（単位：人）

	初級 レベル	中級レベル			上級レベル			母語話者 レベル
		中級前半	中級	中級後半	上級前半	上級	上級後半	
2013年調査	0	5	9	8	1	1	0	0
2015年調査	0	1	6	12	3	2	0	0

⁷ JSPS 科研費 24251010「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—」（代表者 迫田久美子）による公開である。

習者の数が 5 人から 1 人に減り、最も高い上級レベルの学習者が 1 人から 2 人に増え、全体に日本語能力レベルが向上している様子が見られた。

しかし、ゼロ初級レベルから 1 年未満の日本語学習で 13 人全員が中級レベルに到達したことと比較して、2 年間という日本語学習の期間を考慮すると、学習者の日本語能力に、それほど大きな変化が見られなかったとも言うことができる。2013 年の調査の際に、既に上級レベルと判定されていた学習者もいたが、2 年後の調査において上級後半レベルに到達した学習者はいなかった。また、対象となった 24 人の学習者を個別に見てみると、全員の日本語レベルが向上したわけではなかった。24 人中 3 人の学習者は、2015 年のテスト測定による日本語能力レベルの方が、2013 年より低い結果であった。モスクワで学ぶ日本語学習者については、日本語能力が中級レベル以上になると、学習期間とともに能力が順調に向上するのは難しいことが推察される。

この結果のみから一般化することはできないが、モスクワという外国語としての日本語学習環境においては、初級レベルから中級レベルにかけての日本語能力の向上は速いが、中級レベル以上になると能力向上の速度が比較的緩やかになる可能性が指摘される。

9. おわりに

本稿では、ロシア語を母語とする日本語学習者に関する音声習得研究の概要を示し、その一部である 2013 年と 2015 年の 2 回のモスクワでの調査について詳しく紹介した。また中間報告として、現在までの研究の進捗状況と、今後の分析作業の手順についても記した。

これまでにまとめられた日本語能力測定テストの結果から、対象者 52 人の日本語能力レベルの判定が行われた。2013 年と 2015 年の縦断調査に参加した学習者 24 人の 2 回の結果を比較すると、2 年の間に全般的に日本語能力レベルが向上している様子が見られた。ただ、学習者を個別に見てみると、全ての学習者の日本語能力が向上していたわけではなかった。また、モスクワという外国語としての日本語学習環境において、ロシア人学習者は、学習歴 1 年未満という短い期間で日本語能力がゼロ初級レベルから中級レベルに到達するものの、その後の能力の向上は緩やかになる可能性が推察された。

本研究では、横断研究と縦断研究の手法を併用して、ロシア人日本語学習者の音声習得の実態を把握することを目指している。今後、2013 年と 2015 年に収集した「(c) 対面会話」の音声データについて分析作業を進め、学習者の日本語能力レベルごとの音声習得の状況、ならびに音声習得上の困難点などを明らかにしていきたい。

謝辞

本研究の調査で用いた手続き、内容の一部については、JSPS 科研費 24251010「海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的な繋がりに基づいて—」（代表者 迫田久美子）を参考に作成しました。また、調査の実施においては、筑波大学留学生センターが開発した TTBJ (SPOT90) および J-CAT を使用しました。TTBJ の詳細は「<http://ttbj.jp/>」、J-CAT の詳細は「<http://www.j-cat.org/>」をご参照ください。本研究は、JSPS 科研費 26884014「ロシア語母語話者による日本語音声習得—教材開発と音声習得理論の構築を目指して—」の助成を受けたものです。

ここに改めて、調査にご協力いただいた皆様にお礼を申し上げます。

参考文献

- (1) 小熊利江 (2013) 「モスクワ市立教育大学 2011 年度機関報告」『日本語教育連絡会議論文集』25, 日本語教育連絡会議, 130-133.
- (2) 小熊利江 (2015) 「モスクワでの日本人家庭訪問プロジェクトー海外の日本語教育における体験型学習の事例ー」『BATJ Journal』16, 英国日本語教育学会, 19-26.
- (3) 国際交流基金 (2013a)『海外の日本語教育の現状』国際交流基金編, くろしお出版
- (4) 国際交流基金 (2013b)『ロシア (2014 年度) 日本語教育 国・地域別情報』
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/russia.html>> (2016 年 1 月 1 日)
- (5) 助川泰彦 (1993) 「母語別に見た発音の傾向ーアンケート調査の結果からー」『日本語音声と日本語教育』文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」D1 班 平成 4 年度研究成果報告書, 187-222.
- (6) 戸田貴子 (2006) 「音声教育へのニーズーアンケート調査から分かることー」『第二言語における発音習得プロセスの実証的研究』平成 16 年度～17 年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2) 研究成果報告書, 89-137.
- (7) 仲矢信介・稲垣滋子 (2005) 「ロシア・NIS 諸国への日本語教育支援再考」『日本語教育』127, 51-60.
- (8) 渡辺裕美 (2011) 「ロシア語母語話者の発音の特徴と指導における問題点ー日本人日本語教師に対する調査からー」『日本語教育紀要』7, 国際交流基金, 71-84.
- (9) 渡辺裕美・松崎寛 (2014) 「発音評価の相違: 日本人教師・ロシア人教師・一般日本人の比較」『日本語教育』159, 61-75.